

第1回兵庫県教育振興基本計画検討委員会 議事要旨

平成25年5月20日(月)10:00~12:00
兵庫県民会館11階「パルテホール」

1 開会

2 開会挨拶

開会后、高井教育長が挨拶を行い、出席者に出席のお礼と第2期ひょうご教育創造プランの策定に向けた審議を依頼した。

3 委員紹介

4 委員長・副委員長選出

委員の互選により、梶田 奈良学園 理事（兵庫教育大学 前学長）を委員長に選出。梶田委員長が、長瀬 神戸女子短期大学 学長を副委員長に指名。

梶田委員長から、委員長就任に当たり、挨拶があった。

- 国の教育振興基本計画策定に際し、一番議論したことは、教育というのは堅実であって政権交代や知事が代わったから方向性が変わるような激変があっては困るが、前進はしなくてはならないということ。
- 県が教育振興基本計画を作るということは、今の時点での決意表明というだけでなく、少なくとも10年の見通しの中での5年で、こういう柱で兵庫県の教育を発展させていこうということ。

5 資料説明

協議に先立ち、第2期ひょうご教育創造プランの策定、国の第2期教育振興基本計画の答申、兵庫の教育の現状と課題について、事務局が説明を行った。

6 協議

(委員長)

- 本日は、兵庫県の教育の現状や課題を、まずそれぞれの立場で身近に感じたり、考えていることを自由に出していただきたい。

(委員A)

- 前回の教育振興基本計画では、兵庫県立大学を中心に上げていただいているが、県内には様々な大学があり、入学者の問題や卒業生の就職問題、グローバル化、地域との連携などの共通の課題を抱えている。県の施策がトータルで見渡せるような計画ができないか。

(委員B)

- 県内の国公立大学からなる「大学コンソーシアムひょうご神戸」という組織があるが、幅広く国公立大学が連携しながら兵庫の教育施策を考えていく方向性が必要である。
- グローバル化社会を生きる子どもの教育はどうあるべきかという視点が必要である。その中で、1つには「ことばの力」が大切であり、日本語の力と、英語、外国語に早期の段階から慣れていく必要がある。2つには「表現する力」が大切であり、自分を表現する力やそれをベースにしたコミュニケーション能力、対話する能力を育てる必要がある。3つには「日本の未来を担うという気概」、「自尊感情や郷土を大事にする心」、「国や外国の人を大切にする心」などが必要である。
- 心豊かな人ということも挙げたい。知・徳・体の調和が大切であり、自尊感情、自分にはかけがえのない存在であると思える教育を進め、その上で他人への思いやりや寛容の心を育てていく。また、自立、責任、創造ということがキーワードとなる。社会の一員としての自覚・自立、社会の一員としての責任、それから新しい時代をクリエイトしていく創造、これが兵庫県が大切にしてきた心豊かな人の要素になると思う。
- 現在の社会状況に対応する教育が大切である。そのうちの1つが、子どもが安心して学べる学校づくりである。信頼される学校、信頼される教師、また管理職を含めた教師力のアップを進めていく必要がある。2つ目が地域で子どもたちを育てていく兵庫づくりである。家庭の教育力、地域の教育力、学校に支援していく教育的社会体制をつくる必要がある。3つ目が世界に通用する日本人の育成である。日本は、科学立国、技術立国であり、長い歴史・伝統をもつ文化立国という視点が必要である。

(委員C)

- 性教育の視点も必要だと思う。いじめの問題にもなったり、教師の意識の問題もあるが、性同一性障害とか性的マイノリティの方々への視点が必要ではないか。

(委員D)

- 「確かな学力」について、「学力」とは何かという共通認識が必要である。学力とは、生き抜く力を育てるためのものなのか、あるいは就職や社会に出るために有利になるという意味での学力をいっているのか、明らかにする必要がある。
- グローバルな視点を持った人材育成を、どう具体的に実践していくかを打ち出す必要がある。
- いじめ・人権の視点を踏まえた生命に対する尊重や、被災地だからこそ打ち出せる防災教育を発信していく必要がある。

(委員E)

- 多様性・多様化がますます重要となる時代を迎える。教育の現場や家庭で、多様性・多様化が尊重される教育の風土や考え方を根付かせることが基本的なことであ

り、いじめの問題にも深く関与していることだと思う。多様な生き方をサポートできる教育のシステムを考えていく必要がある。

- 専修学校は職業の現場とのリンクを図りながら、多様な職業教育を提供しており、子どもたち一人一人の多様な夢が育てられ、実現していく教育を進める必要がある。

(委員 F)

- 国で道徳教育のあり方が議論されているが、その基本となるのは家庭教育である。何でもかんでも学校に押しつける風潮があるが、学校でできること、家庭でできることには違いがあり、基本的な生活習慣や社会的なルールやマナー、善悪の判断などは幼少期に家庭教育で身に付けておくべきだと思う。
- 地域による学校支援については、学校が地域に求めていることと、地域ができることをしっかりと区別して関わっていくことが必要だと思う。
- 学力低下に対する取組として、丹波地域で「学びフェスタ」という事業を行ったが、普段、学校のテストや宿題ではスラスラ出来ている子でも文章を読んで考えたり、自分で判断したり、頭を柔らかくして別の角度から考える力が欠けているように感じた。「確かな学力」を身につける施策が必要である。
- スポーツ振興について、のじぎく兵庫国体を契機として県下各地で様々なスポーツが進められてきた。メジャーな競技はそれぞれの競技団体がしっかりとしており発展しているが、篠山市で行ったフィールドホッケーのようなマイナーな競技は、国体終了後 10 年近くたちなかなか後継者が育っていないため、マイナーな競技に対する県の施策が必要である。また、全国や世界で活躍する優秀な選手を兵庫県で育てていただきたい。

(委員 G)

- 子どもたちの体力は向上傾向にあるということだが、決して兵庫県は高いわけではない。体力を高めることはそんなに難しいことではなく、学齢期に体験したスポーツを一生楽しむという習慣を持ち続けることが重要であり、学齢期にスキル中心に体育が行われると一生続かない。学齢期に学んだスポーツを一生楽しむライフスタイルを構築していくことが重要であり、それは結果として体力が高まることになる。
- 資料にあまり社会教育が取り上げられていない。生涯学習イコール社会教育ではない。生涯学習の「学」を楽しいという字に当てて、「生涯楽習」という人がいるが、「楽しいからやる」、「好きだからやる」ではなく、学校を卒業した後、学ばなければならないものが社会教育だと思う。社会教育を幼児期の学習から高齢期の学習までの生涯を通じた教育として一本のラインを通すことが大切だと思う。

(委員 H)

- 子どもは、大人社会に対する信頼をなくしつつあるのではないか。例えば、国際化とか語学が必要だと言われている中で、日本人は戦後延々と勉強してきているにもかかわらず、東アジアの中で最下位に近い語学力しか持っていない。本当に子ども

もの価値観や子どもに必要なものを見据えて提供できているのかが問われていると思う。

- いじめの対応については、子どものためと言いながら実は大人の価値観でしかなかったことが露呈したものではないか。本当に子どものためになる教育となるような根本的な見直しが必要である。

(委員 I)

- 昨今の教育現場の状況について、学校、地域、保護者、大学教授等と意見交換をしたが、特にいじめ問題においては、今の子どもたちには自尊感情や人への思いやりという部分で、重大な変化が起こっているように思う。
- 教育現場はあまりにも多忙であると感じている。教員は、土日もなかつたり、深夜まで残業をしたり、多忙さ故に子どもたちに目を向けられず、小さな変化に気がつかない現状にあるため、教員の資質向上と合わせて、多忙化の対策を盛り込んでいただきたい。
- 普通科高校も含めてキャリア教育を充実していただきたい。兵庫県はものづくり立県でもあり、「こういう人になりたい」「こういう仕事をしたい」「こういうことで世の中の役に立ちたい」という意識の醸成を盛り込んでいただきたい。
- 人間としての基盤に関わる問題として、障害児・障害者に対する一つの個性としての視点を持って、特別支援教育の進展を盛り込んでいただきたい。

(委員 J)

- 教職員の多忙化については同感であり、教育の中で重要なのは、教職員が生徒や保護者から尊敬され、非常に立派だという意識を持たれることである。その中で、教職員の処遇について尊敬に値する給与体系にしていただきたい。今、給与体系だけを上げるのは難しいと思うが、人から尊敬され、子どもたちの教育にあたっている人たちの処遇を改善することが一番重要だと思う。
- 教職員が生徒や保護者から信頼されるためには、採用条件を厳しくして、本当に信念を持って子どもの教育を行えるような教職員を採用することも必要だと思う。
- 豊かな心の育成については、いじめや問題行動が顕著な状況にあるが、学校・家庭で真剣に改善に取り組む必要がある。
- 人を大事にするという心を道徳教育副読本や教師の話だけで育成することは非常に難しいと思う。予算は必要だが、偉人の足跡を学ぶとか施設を見学するなど体験を通じて心を育成する教育体系を検討していただきたい。

(委員 K)

- 小学校に行くまでに、幼児教育あるいは家庭教育で押さえておかななくてはいけないことができていないということが、学校教育の様々な課題として浮かび上がっているのではないか。
- 幼稚園や保育園については、国の子ども・子育て支援新制度により平成 27 年度から制度改革が行われる。その中で、「どの施設も幼児教育を行う」ということに

なっているが、「幼児教育」、あるいは「教育」とは何なのかという視点を持って関係者が取り組んでいるのかわからない。これから様々な形態の施設が幼児教育に参入してきた時に、今小学校やその後の学校段階で起こっているような課題がより顕著に現れてこないかを危惧している。

- 兵庫の教育の今後の方向性については4点挙げたい。1点目は、小学校での学習意欲や学習態度につながるよう、幼稚園では豊かな環境の中でしっかりと遊び、絵本や劇、音楽などの様々な文化に触れながら、子どもの情操を伸ばしているが、今後、本来幼児教育としてふさわしい施設、環境、教育内容について、より共通理解を図っていく必要がある。また、各市町においては、小学校以上は教育委員会、就学前は保育と幼児教育が縦割りになっており、情報交換できないまま小学校に行っている状況にある。就学前の幼児教育の様々な問題を整理し、縦割りではない状況で情報交換をしていく必要がある。
- 2点目は、自尊心、自律心である。自尊心、自律心は、まずは家庭教育で育てていくものであるが、最近幼稚園のPTAや育友会などのボランティア組織に参加する保護者が年々減っている。非常に利己的な意識の保護者もいる中で、自分の子どもだけではなく、みんなで子育てを支えていくという意識の高揚を就学前からしっかりやっておく必要があり、家庭教育や親教育、それにかかわるボランティア組織の確立に力強く取り組んでいかなければならない。
- 3点目は食育である。「好き嫌いがあってもいいんだ」、「自分の好きなものしか食べなくていい」という保護者がおり、理由を聞くと、「子どもが食べないから諦めている」と言う。しかし、本当は「食べなければお菓子が与えられる」、「おなかが減ってないのに食事が出される」というようなことがあり、どのように子どもたちに好き嫌いをなくしていくのか、どのように食育をしていくのかということ、若い保護者自身が知らないまま育ってきたことが分かる。食べるということは、食物を自分の中に取り込んで自分が大きくなっていくという生きていく姿勢の一環であり、そういう意味で、地産地消も含めて食育に早期から取り組んでいただきたい。
- 4点目は幼保の教職員の処遇の改善である。今は3才で半分ぐらいがおむつをして入園してきており、幼稚園の教諭、保育所の保育士に非常に高い資質能力が求められている。その意味でも、処遇や十分な人材の配置が必要である。

(委員L)

- 小学校に入ってきた段階で、地域や学校とは関わらないと思っている保護者は多く、大人が規範意識を持って子どもの教育に関わっていく体制が必要である。小学校段階では、親と子ども共々に宿題を出すなど保護者が教育や学校に関わる機会を作っていただきたい。
- 学校と地域との連携については、地域の核となる人が中心に学校に入り、地域との関わりを活性化する必要がある。
- 教職員の資質能力、特に規範意識は大切であり、また、管理職には管理能力や学校経営力という新たな力が求められている。
- 携帯やインターネット、ゲーム等については、正しい使い方やモラルなどを社会

全体で子どもに教えていくことが重要である。

(委員M)

- 兵庫県では、2030年には現在より15%程人口が減少する人口減少社会になる。特に、我が国は65才以上の割合が23%となっており、超高齢社会に入ったということが言える。このような社会における教育のあり方を考えていく必要がある。
- 平成27年度には、高等学校の学区が再編され、経営的に厳しくなる私学が出てくることが予想される。今後の社会のあり方を考えると、教育だけではないが教育の中にも民間活力が大切になってくると思う。そういう意味でも、兵庫の私学の存在というのは、非常に重要な存在であると思う。今後、県立高等学校教育改革の検証をしていただくとともに、私学の火が消えないような環境を生んでいただき、公私の協調と公教育をお互いに支えていく環境の創出をしていただきたい。

(委員N)

- 「体験教育」については、非常に安易にとらえられがちなところがあり、体験さえすれば、それが学びになるというような誤解がある。
- 「体験」を通じて学ぶということを実現するためには、その体験的に学ぶ場のデザインや指導者の力量アップをしっかりとすることが必要である。また、「社会を生き抜く力」の育成に向けた「体験教育」は非常に効果的だと思うが、単にいろいろな体験を学校や生涯学習の様々な場面で設定するだけにならないよう、より効果的に実践していくための枠組みをしっかりと充実させていきたい。
- 生涯全体を通じた自立・協働・創造に向けた力の習得という視点から言えば、今地域活動に県民が関わっていくことが重視されている。学びの成果を地域活動や市民活動に生かすということは、学びがその活動と全く別の場面で行われるのではなく、活動を通じて成長していくということが重要になってくる。
- 生涯学習に対する支援については、学ぶことに対する支援が重視されている状況にあり、学んだ後活動を始めたなら、通常その活動に対する支援はない。活動を通じて成長していくということを重視するのであれば、その活動自体を継続的に支援していくことが重要である。
- 「知」を部品として学ぶということのみならず、「知」を文脈の中に位置付けてとらえていくとか、新たな文脈を創造していく力が今求められており、このような生涯学習のダイナミズムというものを盛り込んでいただきたい。

(委員O)

- 一番大事なことは、自尊感情だと思う。いじめの問題においても、夢を持つことにおいても、自尊感情が育っていないことが問題である。
- 子どもたちは、宿題をはじめ、言われたことは子どもたちは確実にやっている。しかし、自分自身で問題を見つけ、意欲を持って学習することが欠けている。生涯学習においても自分で問題を見つけて自分で学習していく力が必要になってくるため、子どもたちが自ら進んで学ぶ学習習慣化を図っていく施策が必要である。

- 幼、小、中、高校、大学も含め、特に公立学校においては、自校種だけを教育していくのではなく、他校種の子どもたちの学びをしっかりと学び、校種間連携をもっと進めていただきたい。

(委員 P)

- 校種間連携は重要だと考えており、まずは学校教育のスタートである幼稚園教育を理解できる場を提供していただきたい。保護者にとっても子どもを社会に出す第一歩であり、幼稚園教育と家庭教育との接続の部分で様々な課題もあるため、そのような視点でも幼稚園教育をクローズアップしていただきたい。

(委員 Q)

- これまでの兵庫県の教育を考えた時、阪神・淡路大震災は重要な視点である。震災後、「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」が設置され、「生きる力」の育成に向けて取り組もうとした時に神戸市須磨区の事件が起こり、「心の教育緊急会議」が設置された。その提言の一つが、中学校2年生の「トライやる・ウィーク」であり、兵庫型「体験教育」の中核的役割を担う全国的に注目を浴びている事業である。そのような部分は今後も大事にしていきたい。
- 防災教育について、阪神・淡路大震災当時、新任だった教員はもう40才、当時、中核だった教員は退職期を迎えており、地域住民の方々も含めて世代交代を迎えている。当時の考え方を普遍化、一般化していくような作業も必要ではないかと思う。
- 今日の資料の中でも、「兵庫型『体験教育』」、「兵庫型教科担任制」、「兵庫版道徳教育副読本」、「兵庫の防災教育」といった言葉が出てきており、今後5年間を見据えて、「兵庫型〇〇」や「兵庫版〇〇」というような方向性が出せればと思う。
- 子育て支援や障害者施策など昨今の教育を取り巻く制度の状況が分かる資料を今後提供していただければ議論が深まると思う。

(委員 R)

- 今、学校教育の中に、食育、人権、租税、統計、視聴覚、キャリア、金銭、消費者、国際、情報、新聞、防災、道徳など、沢山の課題教育が持ち込まれており、それが多忙化の原因の一つになっていると思う。
- 学校教育はシンプルであればあるほど、そこに工夫が生まれてくるが、今は逆にやらなければならないことが持ち込まれ過ぎて工夫がなくなっている。将来に向けて、一番ベースになることを話し合い、できるだけシンプルな計画を作っただけであれば現場は独自に工夫したり、膨らませたりすることができると思う。
- 小学校は現行学習指導要領が全面実施になって3年、移行期から含めると5年が経過するため、その検証を小学校ですていく必要があると考える。

(委員 S)

- 教職員の構成を踏まえた資質向上が重要である。団塊の世代が退職し、若い教職員が増えており、資質向上に力を入れていかなければならない。また、年齢構成で

言うと、30代半ばから後半の教師は学校を引っ張っていく原動力になるが、この世代の人数が少ない。将来の管理職になる人材という点からも、課題となってくると思うので、年齢構成をカバーするようなシステムを考えていかなければならない。

(委員T)

- 特別支援学校では、知的障害の生徒が増えており、卒業後も進路担当者など、教員一人一人の個人的な関わりでサポートしている現状があるが、出来れば教育の枠の中で情報提供など、サポートしていける場が必要ではないかと考える。

(委員U)

- 兵庫で教育を受けた子どもたちが学校を卒業して、専門的に学問を探究したり、心豊かで命の尊厳を知って地域の担い手になるような人材を育成していくための教育を深めていきたい。

(委員V)

- 学校現場で感じていることを2つ申し上げる。1つは、生徒の人や物に対する無関心さについて、人が前に立っていても避けない、当たっても平気というような生徒が多い。また、職員が落ち葉を集めていても平気でそこを踏んでいく。悪気は全然無いようだがそういう感覚に違和感がある。兵庫県では、これまで「体験教育」を重視して進めてきているが、生徒の状況を見ていると、別の観点から質・量を見直す必要があるように感じる。
- もう1つは、よく若者に対してわがまま、身勝手、内向き志向などの批判がある。しかし、兵庫県では、阪神・淡路大震災以降、防災教育に取り組んできた成果として、東日本大震災の被災地支援に高校生がどんどん出かけて行った。本校でも第1学年320人のうち30人の募集をしたところ80名の応募があった。現地に行った時も「つい先日も〇〇高校の人が来てくれました。」という話が非常に多くあり、本県が取り組んできた防災教育の成果が出ているのではないかと。
- これらのことから考えると、機会の作り方が重要だと言える。内向きという目で生徒を見ると、そのような力は出てこないのではないかと。一方で、家庭の経済力が落ちている状況もあり、海外留学や研修旅行に誰でも行ける状況にあるわけではないため、海外留学等を支援する制度設計が必要である。

(委員W)

- しっかりと5年の検証ができています。
- 家庭の経済状況などについては、雇用問題にも関わることであり、教育について考える時には、福祉との関係も考慮する必要があります。
- 人口減少社会において、学校の統廃合が進んでいる。その変化を見据えて、福祉や教育を優先的に考えていただきたい。
- いじめについて、一番守らなければならないのは命である。いじめに立ち向かう心がなくなっているのではないかと。いじめられている子どもはとてもひどいこ

とをされているのに、いじめてくる人に敵意を起さず、いじめられている意識を受け入れて心の居場所をなくしているように感じる。それは自尊感情の問題であり、人権感覚と道徳性の関係性を考慮しながら取り組む必要がある。

- 学力については、学習権を保障した上でそれぞれの子どものために必要な学力を身につけていく必要がある。
- 兵庫県では、精神疾患で休職する教員の割合が全国に比べて低い状況にある。教員が追い詰められていては良い教育は提供できないと思うので、今後もこのような兵庫の教育の良い部分を伸ばしていただきたい。

7 閉会挨拶

松田教育次長が、いただいたご意見に対してお礼を述べた。

8 諸連絡

次回の会議の日程調整。

9 閉 会